

## 上田教授新作能の魅力

## Characteristics of Professor UEDA's Noh Plays

伊藤 順子

ITO Junko

---

**Abstract:** In spite of Aristotle's theory that tragedies attain catharsis through fear and pity, I myself feel catharsis at the happy ending of tragedies. That is the reason why I love Professor Ueda's *Noh: Othello*, *Noh: Double Nora*, *Noh: Hamlet*, and *Noh: King Lear*: for in the very ending of them, I feel a flash of light gleaming upon the hero or heroine. This time after seeing Professor Ueda's new Noh play *Noh: King Lear*, I am convinced that it is a characteristic of his Noh plays which I cherish deeply.

---

**Keywords:** Aristotle's catharsis, Ueda's Noh plays  
アリストテレス「カタルシス」、上田邦義「新作能」

---

アリストテレスは『詩学』において、悲劇とは、「あわれみとおそれを通じて、そのような感情の浄化（カタルシス）を達成するものである。」<sup>1</sup>と述べているが、正直、私はハッピーエンドの時に、えもいわれぬ感情の浄化を感じる。従って、シェイクスピア最大の悲劇『リア王』が上田先生の手により、『能・リア王』として生まれ変わり、最後に「救い」を得られたことに、私は最高の喜びを禁じえない。

上田先生の御作を鳥瞰するに、そこには必ず「救い」や「希望」が一条の光として差し込んでいることに気がつく。

『能・オセロー』では、「ああ懐かしきオセロー様、お会いいたしたく、お迎えに。」「おお、この不思議、この喜び、この喜びよ。」<sup>2</sup>と無上の喜びが謡われ、『からくり能 友月』では、「生死の海を渡りゆき、得脱の身となりにける。」<sup>3</sup>と成仏に救われ、『能・ノーラ または人形の家』では、「人の心も海なるべし。潮のごとくに満ち干あり。」「渚に波の打ち寄せて。また碎けては結ぶなり。」<sup>4</sup>と流転の中にも希望が謡い舞われている。

今回の『能・リア王』で、最後に「真実の國へ行き給え真実の國へ行き給え」<sup>5</sup>と繰り返して謡われるところでは、今まさに父娘が一体となって天に昇る様子が目に見えるようであ

る。

これは、『能・ハムレット』の「光の国に至りつゝ、まことの愛を悟り得たり。」<sup>6</sup>を彷彿とさせる。若々しいコーディーリアの足立禮子氏の声が、天からあたかも光のように降り注ぐように感じた次第である。

私はどのように過酷な悲劇の中にも、必ず一筋の光を与えてくれる上田教授の新作能の特徴と魅力は、正にそこにあると確信した。

以上

### 【註】

- 
- 1 アリストテレース『詩学』松本仁助・岡 道男訳、岩波書店、1997年、p.34。
  - 2 上田邦義『「能・オセロー」創作の研究』、勉誠社、1998年、p.23。
  - 3 梅谷陽二・上田邦義「新作『からくり能 友月』台本」（『融合文化研究』第8号）、2006年、p.16。
  - 4 上田邦義「能・ノーラまたは人形の家」（『融合文化研究』第7号別刷）、2006年、p.12。
  - 5 上田邦義『能・リア王』（台本）、2007年、p.15。
  - 6 上田邦義『能・ハムレット』初演台本」（『融合文化研究』第5号）、2005年、p.11。